

「自由と画布」落合氏の「佐伯祐三の二元性とその解決」パリ日記 杉浦氏

これは明子氏一人で考えたものではない。彼女一人では書けない内容である。また、その内容は多くの矛盾を含んでいる。落合氏の「救命院日誌」も矛盾を矛盾として理由付けしている。ある人に言わせると「パリ日記（これはハガキや手紙を直接コピーしたものである）」には当時使われていなかった現代文字が使われているようだ（例えば佛→仏）。また体温と脈拍の関係もおかしい。

「自由と画布」

ここでは周蔵の金の出所は麻薬ではない。落合さんも話していたが、明子は原稿を小出しにしてくるということだった。落合さんの本にも書いてあるが落合さんがなにか証拠があればなあと言え「お婆さんの着物の袖から、こんなものが出てきましたと持ってくる。

吉園佐伯関連についての本には米子は悪人扱い、山田、祐正は周蔵と面識があることになっている。だからこの手の話は山田がなくなってから降って湧いたようにでてきたのだ。米子は鬼女で男とすぐ関係するように書かれている。ところが坂本勝、山田新一によれば米子がかいがいしく佐伯の世話をしていた。また、仲が良かったかが示されている。佐伯は十分なお金を持っていた。東京に来たとき祐三は7,000円という大金を祐正から遺産分けとしてもらっている。これは今の金で7,000万円を越える金であろう。また母からも十分な仕送りを受けていた。第2次渡仏の時、佐伯家の事情で金が出せなかった。それで佐伯の絵を売る会が開かれた。これもくわしく書かれている。この時得たお金は6,000円、米子の実家に3,000円渡し、月々返済してもらおうということで3,000円の金を持ってフランスに行った。フランスでは路上で買っていく人が増え画商もつこうとしていた。つまり佐伯は十分お金を持っていたのである。周蔵が麻薬を扱うということが書かれ始めたのは落合氏の本からである。自由と画布では佐伯の金銭的援助をしたのは周蔵が最初は先祖の土地を売ったお金とされ、そのため親戚から嫌な目で見られたなどと書いてある。ところが金のでどころは若松家と変わる。薩摩治郎八のルーアン大学日本講座設立、日本館建築の際、周蔵が10万円のうちの3万円を父、林次郎の財布からしばらくとって送ったと書いてある。まず、こういう事があり得るか、当時それだけの金を送ればなにか問題になったり、話題になったことだろう。とにかく、周蔵のお金の出所は、最初は、父、若松家、後には麻薬の栽培と変わっていく。これだけでもおかしいのではないだろうか。いい加減な話を信じた学者たちは、皆、後悔している。米子の加筆に関する新聞記事は共同通信の一記者の焦りに

よるものであった。「この自由と画布を書いた人物について週刊誌の記事」
いまでの週刊誌で紹介されたものをあげてみましょう。

アエラの33ページ

明子はさまざまな人物に資料を小出しにしていった。武生市に寄贈した作品以外で、すでに複数の画商や実業家に分散して売却してしまった作品もある。

落合氏 p127

明子は山甚に佐伯作品11点などの代金を受け取ってしまった。

週刊新潮

「その気にさせた女性」抜粋

河北氏をその気にさせた女性とは？吉園さんを知る人の中には「慶応大学医学部卒」あるいは「東邦大学医学部卒」と彼女から聞いた人もいる。鎌倉で吉園さんに2億5千万円という大金を貸した人がいる。「そのころ吉園さんは天声人語を執筆している。」「彼女の生い立ちは彦根の井伊家の出身」で、「実の父がもと彦根市長の井伊直愛さんだ」というのです。「障害者の福利施設を作りたいから寄付を」「ワケあって吉園家に養女にでたのだが、その井伊家と吉園家で起こった事件の後始末に大金が必要になったと」こういうことで2億5千万円も貸してしまった。彼女の話は後で全てうそだとわかった。このことで訴えられそうになったので実業家から4億円手に入れ、返済にまわしている。吉園さんを知る別の知人によると、そのころ「ギャラリーとぼ舎」という画廊を持ち、すさまじい勢いで絵を買い捲っていたという。

河北氏の次男の弁

父と明子さんとのことでいろいろと、たとえば、病院の特別室への入院代は彼女もちなのではないかといった噂が立っているようですが、ちゃんと自分の通帳から出しています。父は無防備な性格で、本物と思ったからそういったんだという感じでしたから、しょうがないですよ。遺族のくせに、冷たいようですが、父が年をとって盲になったといわれれば、それもしかたのないことだと思います。（この特別室は巧さんも入っていた。そのお金の出どころは吉園明子氏であった。だから河北氏の遺族は自分の通帳からという話をしたのである。）

週刊文春

その渦中の人物、吉園明子氏が今回小誌に口を開いた。今回の真贋騒動については？「もうわからない。でも今はもう私が作ったということになっているんですよね」。佐伯祐三贋作事件の核心を握る、このコレクションの人物はご本

人でも真贋がわからなくなっていることをあっさり認めたのだ。「父が作ったのかもしれないね、ハハハハ。今回は自信がないですね。言われっぱなしで。父から聞いたわけじゃない。父との会話で佐伯祐三さんの名前は一度も聞かされたことがないんです。残された父の遺書を見ただけなんです。贋作派のボルテージは上がるばかり。その根拠はこれまでの行状にある。経歴詐称、火災保険や生命保険の詐欺疑惑、贋作絵画の販売と、数え上げるときりがないのだ。週刊新潮では、周蔵から佐伯の話を書いたことがない吉園明子が周蔵から聞いた話として書いている。落合氏は「自由と画布」は伝聞だから「パリ日記」は巧さん主導のものだから問題外と言って取り上げもしない。落合氏の書いた本だけが佐伯の真実を語るということになる。ところが、不思議なのは最近の氏のHP、「佐伯祐三の二元性とその解決」で第一章 武生事件・「パリ日記」の抹殺という項目を設け、中島裁判に負けたのは「パリ日記」を主としてくれなかったからだと話をひっくり返している。下記は氏のHPから抜粋したものである。

『準備室は、寄贈作品の来歴証明として吉蘭家から提供された寄託資料の中から、疑惑を鳴らすに足る矛盾・虚構を発見するしかない。ところが、準備室が実際に調査対象としたのは、寄託資料の中核である佐伯祐三が自ら綴った「パリ日記」や画用紙に書きつけたメモ等、吉蘭周蔵に送った書簡ではなく、後から補足資料として取り寄せた重要度の低い二次資料の「救命院診察日誌」と、吉蘭明子が聞き書きを綴った随想集の「自由と画布」であった。』つまり、ここではパリ日記が重要と話が変わってきているのである。しかも、「救命院診察日誌」を自ら否定する発言となっている。私は全ての資料を持っている。「自由と画布」は随想集ではない。周蔵の日誌、佐伯祐三さんの手紙、薩摩治郎八さん等の手紙などにもとづいて作りましたと最初に書いてある。そしてカルテの記載が並ぶ。自由人画布、パリ日記をHPで公開できれば、全て白日のもとに照らされ真実が明らかになるのだが。エブラール病院のカルテから佐伯の死因は明らかになっている。落合氏では佐伯とその子彌智子は米子によってヒ素を盛られたと書いている。ヒ素は愚者の毒薬と言われている。なぜならヒ素中毒は、西洋では昔から簡単に見破られてしまうからだ。カルテからはヒ素などという言葉は一切でてこない。エブラール病院の医師は砒素中毒かどうかすぐ知ることが出来ただろう。佐伯の死因は結核の進行、それを自分の娘にうつした、また他の人にもうつすかもしれないという恐怖、佐伯の心底のやさしさなどである。杉浦という修復家のいうことはおかしい。佐伯の絵はつまるところ、人格の違った二人の絵と言っている。彼は「細い線はカンバスを床に置いて描かなければ描けない」とまで言っている。冗談ではない。細い線は私でも描くこと

ができる。佐伯の後輩たち 荻須功德 横手貞美 大橋了介の絵に佐伯とそっくりのものが多々見られる。彼らも米子が後から細い線をいれたとでもいうのだろうか。まったく説明のつかない話の羅列に驚く。